立教日本語教育実践学会　　日本語教育実践研究第 3 号　pp.42-56
R-JLEP
研究論文　Research Papers

日本で教える母語話者教師がよいと考える外国語教育

―自由記述データと捕獲率を用いた分析から―

高嶋幸太（立教大学）
大橋洸太郎（立教大学）

Good foreign language teaching that native-speaking teachers in Japan consider: Based on free answer data and analysis with capture rate

Kota Takashima (Rikkyo University)
Kotaro Ohashi (Rikkyo University)

キーワード：　母語話者語学教師、外国語教育、自由記述データ、捕獲率
Keywords : native-speaking language teachers, foreign language education, free answer data, capture rate

SUMMARY

The purpose of this study is to comprehensively investigate what teachers consider good foreign language teaching. In this study, free answer data were collected from 25 people who teach their own native languages in Japan. As a result, their views could be categorized as 1)class management, 2)teacher's personality, 3)teacher's knowledge, skill and experience, 4)understanding learners, 5)external and material element, and 6)others.

1. 研究目的

今日までの外国語教育学研究において、日本語母語話者教師、英語母語話者教師など母語話者教師に関する研究は多数存在している。しかしながら、日本において複数の言語にまたがり母語話者教師について包括的に調査した研究は管見の限りでは見当たらない。そこで本研究では、日本で教える複数の言語の母語話者教師を調査対象に、彼らがよいと考える外国語教育は何なのか、ということを明らかにするため調査を行った[1]。

2. 先行研究

日本国外、つまり自身の文化背景とは異なる環境下で日本語を教える日本語母語話者教師を対象にした研究は数多く存在している。例えば、国際交流基金からタイに派遣された日本語専門家を対象に、海外の日本語教育専門家に求められる要素を調査し

た佐久間（1999）や、母語話者である現職日本語教師と実習修了生に対して日本語教師に求められる実践能力を調査した高木・佐藤（2006）、さらに海外教授経験者に海外の日本語教師に望まれる資質を調査した平畑（2009）の研究などがある。

日本における英語教育では、英語母語話者教師と非英語母語話者教師に対する日本人学習者の意識を調査した研究（Murahata and Murahata, 2000; Morita, 2005: Saito, 2014a: Saito, 2014b）や、英語母語話者教師の授業中における日本語使用に関して学習者や教師に調査を行った研究（Rebuck, 2005; Dietze, Dietze and Joyce, 2009; Cotsworth and Medlock, 2013）、英語母語話者教師に対して理想的な英語教師を調査した Romero（2013）などがある。また他の外国語教育では、日本で教えるドイツ語母語話者教師がドイツ語の授業で使用する言語に関して調査した一連の研究（Axel, 2011, 2012, 2013, 2014）や、日本で教えるフランス語母語話者教師を対象に学習者の不安低減についてインタビュー調査を行った Antier（2012）などが存在する。

このように先行研究においても、特定のある 1 つの言語の母語話者教師に関する研究は多数あるのだが、西洋言語・東洋言語問わず複数の言語にまたがった包括的研究は見当たらない。そこで本研究では、「日本で教える母語話者教師がよいと考える外国語教育とは何か」ということを研究課題として調査を行った。

3. 調査方法

web 上でアンケートを行い、調査に同意した 25 名の日本で教える母語話者語学教師から回答を得た。調査は 2015 年 4 月 1 日から 2015 年 5 月 31 日までの期間に行われた。質問項目に関しては資料を参照されたい。なお、本研究ではより多くの知見を得るために、話者や学習者が多い英語や中国語などの言語を教える先生方以外にも、話者や学習者が少ない言語を教える先生方にも調査を依頼した [2]。調査協力者の所属機関、指導言語、教授経験は以下のとおりである。母語話者教師を対象にした理由は、出身国の外国語教育と比べながら、日本における外国語教育の特徴を相対的かつ客観的に捉えることができると考えたからである。

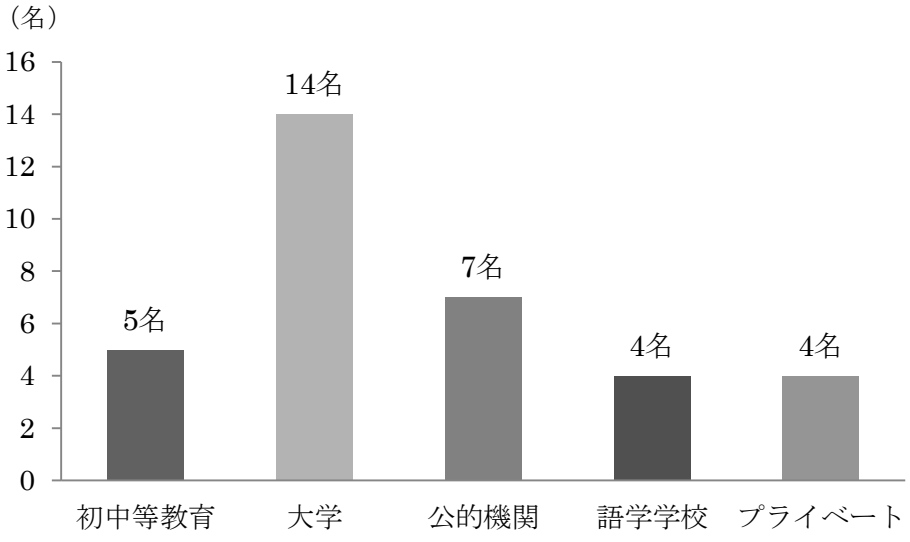

図 1　調査協力者の日本での所属機関（複数回答有）

表１　調査協力者の指導言語

英語	8 名	中国語	5 名
朝鮮語	4 名	スペイン語	1 名
フランス語	1 名	ドイツ語	1 名
スワヒリ語	1 名	ロシア語	1 名
モンゴル語	1 名	ベトナム語	1 名
インドネシア語	1 名		

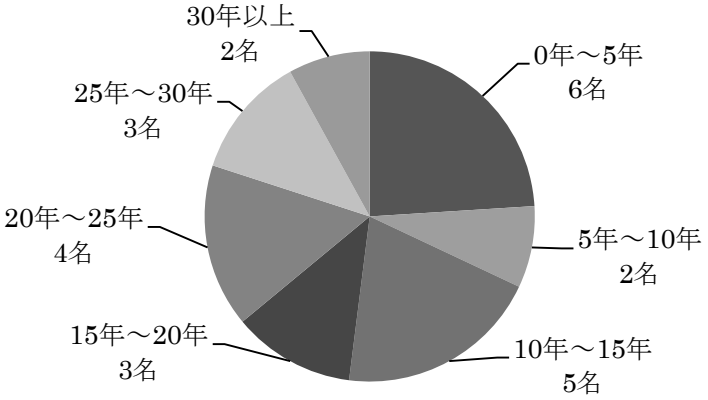

図２　調査協力者の日本での教授経験

分析方法であるが、本研究では大きく 3 段階に分けて分析を行った。まず初めに、自由記述回答型の質問項目に対して KJ 法（川喜田, 1967）を用い、回答から得られたよい外国語教育に関する知見の整理を行った。KJ 法は量的・質的研究を含め、自由記述型の回答項目から得られた知見にどのようなものがあったのかを把握するために用いられる代表的な手法の 1 つである。回答を吟味し、筆者ら 2 名の合議によって外国語教育に関する知見の整理・抽出を行った。

次に第 2 段階として､得られた知見の種類数に関して捕獲率（豊田･大橋･池原, 2013）の計算を行った。捕獲率とは Schnabel（1938）や DeLury（1947）といった古典的な資源量推定の計算方法を応用したもので、調査協力者から得られた知見数が、推定される全知見数に対して、現在どの程度手元にあるのかを表す比率である。すなわちこの数値は、調査で得られた知見の種類数が十分収集済みであるかどうかを示唆する指標となる [3]。高い捕獲率を確認した上で考察を進めるということは、本研究が十分な知見を収集し尽くした上で議論をしていることの裏付けとなる。

現在この手法は授業評価アンケートや企業のイメージ調査といった分野に応用されている。捕獲率の適用には自由記述型の回答項目が知見として断片化され、整理されていることが条件となるのだが、本研究では KJ 法を用いて、得られた知見を断片化しているため、この条件を満たしていると考えた。なお、外国語教育学分野での捕獲率の適用は本研究が初めてである。

最後に第 3 段階として得られた知見の吟味を行い、複数の言語の母語話者語学教師が考えるよい外国語教育に関する知見がどのようなものであるのかの整理を行った。

4. 調査結果

質問項目 1、2、3 の結果を順に記す。

4.1 日本の外国語教育において大切なこと

「日本での外国語教育において大切なこと」として調査協力者があげた 17 の回答を多い方からのべ人数として並べたものが表 2 である。そして図 3 は、1000 回ずつランダムに回答を並べ替え、平均をとった結果の捕獲率の推移である。ランダムに 1000 回分の平均を取った理由は、いかなる順で調査協力者から回答が得られたとしても、平均的にこの程度の値の捕獲率が得られる、という結果を示すためである。最終的な捕獲率は 89.9%であった。

表２　日本の外国語教育において大切なこと

1 位	母語話者や他の学習者とコミュニケーションする機会を多く持つ	9 名
2 位	ニーズや特性などを把握し学習者へ適切な対応をする	7 名
2 位	興味を持たせ、モチベーションを上げる	7 名
4 位	目標言語や自国の文化を教師が魅力的に伝える	6 名
4 位	間違いを恐れないよう不安を低減させ、学習者に自信を持たせる	6 名
6 位	教師が日本語や日本文化を知る	5 名
6 位	正確な言語知識を持ち、目標言語の基礎をわかりやすく教える	5 名
8 位	教師が目標言語を多く使う	3 名
8 位	新たな価値観を提供する	3 名
10 位	楽しく学習してもらう	2 名
10 位	学習者が自己や自文化・異文化を認識する	2 名
10 位	外国語を学ぶ重要性・必要性を伝える	2 名
13 位	教師が必要以上に日本語を使わないようにする	1 名
13 位	外国語教師間の交流・研鑽	1 名
13 位	褒める	1 名
13 位	繰り返し練習する	1 名
13 位	目標を明確にする	1 名

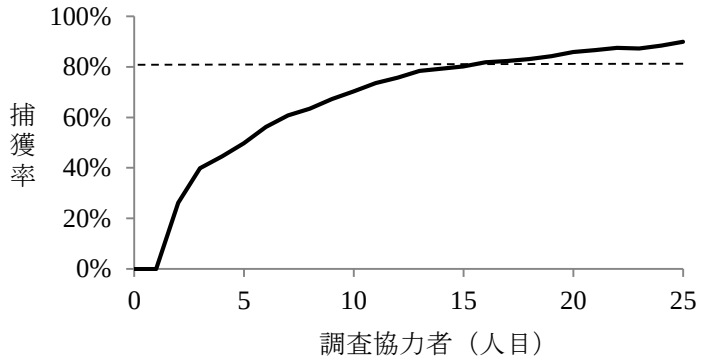

図３　質問 1 における平均捕獲率の推移

4.2 日本の外国語教育において困難な点

表 3 は調査協力者が「日本の外国語教育において困難な点」としてあげた 16 の回答を多い方から順に並べたもので、その平均捕獲率の推移が図 4 である。最終的な捕獲率は 80.3%であった。

表３　日本の外国語教育において困難な点

1 位	機材・教材不足	6 名
1 位	日本人のシャイな性格	6 名
3 位	学習者のモチベーション維持	4 名
3 位	完璧な正確さを求める日本人	4 名
5 位	教師と学習者のコミュニケーション	3 名
5 位	学習時間の不足	3 名
7 位	利益至上主義の語学学校	2 名
7 位	日本語と目標言語の相違点	2 名
7 位	日本のビューロクラシー、トップダウン型の教育体系	2 名
10 位	外交問題から来る影響	1 名
10 位	経済的な支援	1 名
10 位	目標言語の言語的多様性を伝える	1 名
10 位	授業外で目標言語の使用機会が少ない	1 名
10 位	知識偏重型学習・受験のための学習	1 名
10 位	学生の「関心・期待」と教員の「期待」のギャップ	1 名
10 位	想像力があまりない	1 名

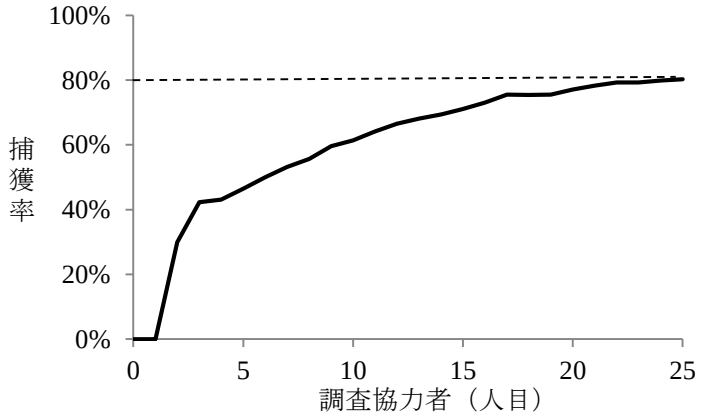

図４　質問 2 における平均捕獲率の推移

4.3 日本で教える上でのよい外国語教師

調査協力者が「日本で教える上でのよい外国語教師」としてあげた 27 の回答を多い順に並べたものが表 4 で、平均捕獲率の推移は図 5 である。最終的な捕獲率は 86.9%であった。

表４　日本で教える上でのよい外国語教師

1 位	思いやりや優しさ、親切さ	10 名
2 位	学習者の母語や文化に関する知識	8 名
3 位	学習者のモチベーションを高める	7 名
4 位	退屈させない楽しい授業	6 名
5 位	粘り強く上達の手助けをする	5 名
6 位	コミュニケーションの機会を多く提供する	4 名
6 位	目標言語を明確に体系的に説明する	4 名
6 位	間違いに寛容で、学習者の不安を低減させられる	4 名
6 位	教授法・学習法に関する知識がある	4 名
6 位	現実社会で実践的に使えるようにする	4 名
11 位	目標言語とそれが使われている国の文化や価値観を紹介できる	3 名
12 位	ユーモアや気さくさ	2 名
12 位	褒める	2 名
12 位	視野が広い	2 名
12 位	学習者主体の授業	2 名
12 位	熱意・情熱	2 名
12 位	学習者の個性やプライバシーを尊重する	2 名
12 位	到達目標を明確にできる	2 名
19 位	学習者のニーズ把握	1 名
19 位	日本と自国を愛する	1 名
19 位	アイディアが豊富である	1 名
19 位	外国語教授経験がある	1 名
19 位	元気さ	1 名
19 位	几帳面さ	1 名
19 位	聞き上手	1 名
19 位	怒鳴らない	1 名
19 位	学習者が自己や自文化を認識できる	1 名

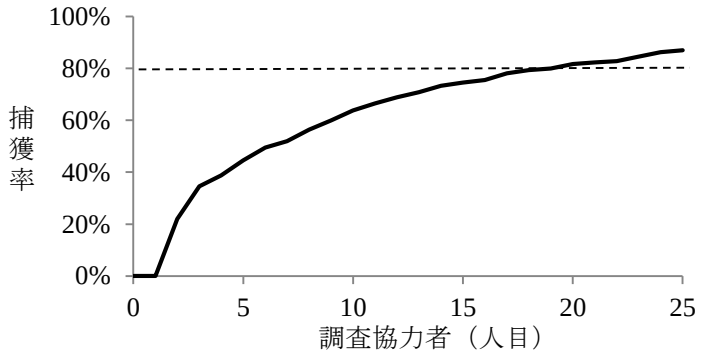

図５　質問 3 における平均捕獲率の推移

5. 考察

上記のとおり、いずれの質問項目においても高い捕獲率が確認できた。このことは次の 2 点を意味する。第 1 に、今回の調査で多くの知見が回収されており、特によく出る知見についてはおおよそ収集済みだということである。これは 3 つの質問項目すべてにおいて捕獲率が 80%以上であったことから確認できる。第 2 に、指導言語が異なっていても、同様の回答が多かったということである。捕獲率は同じ回答の重なり具合から算出されるのだが、捕獲率が高い値を示したということは、同様の知見が多かったということを意味する。

次に、本調査から得られた知見を個別具体的に見ていくことにする。次頁の表 5 は、調査から得られたよい外国語教育に関する知見を一覧にしてまとめたものである。表のとおり、調査から得られた知見を①授業運営、②教師の人柄・人間性、③教師の知識・技能・経験、④学習者理解、⑤外的要素・物質的要素、⑥その他の 6 つに分類した。

①授業運営は、教師がクラスをどのように運営するかという観点から知見を整理したものである。例えば、4.1 で多くの教師が挙げた「コミュニケーションする機会を多く持つ」には、以下の回答があった。

■タンザニア人とコミュニケーションする機会を持つ。（経験 30 年以上・スワヒリ語教師）
■他の学習者とコミュニケーションする機会を作る。（経験 20－25 年・英語教師）
■日本人教師以外とのコミュニケーションは異文化間意識を高めることができる。（経験 30 年以上・英語教師）
■出来るだけコミュニケーションの時間を多く確保する。（経験 15－20 年・朝鮮語教師）

このように、指導言語を問わず多くの教師がコミュニケーションの機会に関して同様の意見を述べていた。次に挙げる「学習者のモチベーションを上げる」もその回答の数が多かった。その一例が以下である。

■学習者のモチベーションを促す方法を学ぶこと。（経験 20－25 年・英語教師）
■目標言語に対する学習の動機付けが大切である。（経験 10－15 年・ドイツ語教師）
■外国語の学びが好きでもなく、なんとなく履修した学生がいて、その学生たちのモチベーションを保つのに苦労した。（経験 0－5 年・中国語教師）

確かに、授業以外で目標言語を使用する場面がない場合、学習者のモチベーションをいかに維持させるかということは大きな問題となる。興味深いことに、モチベーションに関する回答は、授業外での使用場面が多そうな英語教師からも挙がっていた。他にも「間違いを恐れないよう不安を低減させ自信を持たせる」には、次のようなものがあった。

表５　日本で教える母語話者教師がよいと考える外国語教育

よい外国語教育の要素	具体的知見例
①授業運営	・コミュニケーションする機会を多く持つ ・学習者のモチベーションを上げる ・間違いを恐れないよう不安を低減させ自信を持たせる ・目標言語や自国の文化を教師が魅力的に伝える ・退屈させない楽しい授業 ・日本語を抑え、教師が目標言語を多く使う ・学習者主体の授業 ・現実社会で実践的に使えるようにする ・目標を明確にする ・繰り返し練習する
②教師の人柄・人間性	・思いやりや優しさ、親切さ ・ユーモアや気さくさ ・粘り強く上達の手助けをする ・豊富なアイディア ・褒める　・視野が広い ・熱意・情熱　・日本と自国を愛する ・元気さ　・几帳面さ ・聞き上手　・怒鳴らない
③教師の知識・技能・経験	・正確な言語知識を持ち、目標言語の基礎をわかりやすく教える ・教授法・学習法に関する知識 ・外国語教授経験がある
④学習者理解	・学習者のニーズを把握する ・学習者の性格を理解する ・学習者の母語である日本語や日本文化を知る
⑤外的要素・物質的要素	・豊富な機材・教材 ・十分な学習時間 ・学習者のことを考えた学校運営 ・ビューロクラシーでない教育体系 ・良好な外交関係 ・経済的な支援
⑥その他	・新たな価値観を提供する ・学習者が自己や自文化・異文化を認識できる ・外国語を学ぶ重要性・必要性を伝える ・授業外での使用機会を増やす ・学習者の個性やプライバシーを尊重する ・外国語教師間の交流・研鑽

■よい外国語教師は、自身の英語能力が低いと感じている学習者の不安を減らすことができる。（経験 30 年以上・英語教師）
■あえて間違えて見せ、学習者の不安を低減させる。（経験 10－15 年・英語教師）
■学習者が自信を持ち、間違いを恐れないこと。（経験 20－25 年・英語教師）

これは、④学習者理解の日本人学習者の性格で述べる「シャイな性格」とも関連することなのだが、学習者が間違いを恐れないよう、教師が不安を低減させる必要性が述べられている。先行研究でも挙げた、フランス語母語話者教師に対し学習者の不安低減に関する調査を行った Antier（2012）においても、不安低減の重要性が述べられており、信頼関係構築のために学習者の母語や文化を用いてフランス語教育を行うことが提案されている。

②教師の人柄・人間性は、教師の内面に関する意見である。以下が一例である。

■心から相手を思いやって、粘り強く教えること。（20－25 年・モンゴル語教師）
■優しく教えること。（経験 0－5 年・フランス語教師）
■褒め上手で、親切な先生。（経験 25－30 年・中国語教師）
■ユーモアと十分な褒めを使用すること。（経験 20－25 年・英語教師）
■学習者を褒めること（自信を失うような批判をしないこと。日本人は面目を失うことを嫌う）。（経験 5－10 年・英語教師）

このように、教師の人柄・人間性もよい外国語教育における重要な要素だと言えるだろう。また「褒める」という回答も複数あったのが特徴である。

③教師の知識・技能・経験の意見は次のとおりである。

■新しい言語教育の動向に関心を持つ。（経験 25－30 年・中国語教師）
■「なんとなくこうだ」ではなく、学習言語を体系的に説明する。（経験 0－5 年・ベトナム語教師）
■文法を簡単に説明することができる。（経験 25－30 年・インドネシア語教師）
■外国語の使い方をわかりやすく説明すること。（経験 0－5 年・中国語教師）
■教える言語のことを言語学的によく知ることで、語学講師が自分なりに分析できる知識と経験が備わり、学習者の苦労が少なくなると思う。特に学習能力の低い人に教えるには語学講師の教える能力と知識と経験が必要だと思う。（20－25 年・モンゴル語教師）

やはり外国語教師には、目標言語や教授法に関する知識や技能それから経験が求められていることが確認された。

④学習者理解に関する一例であるが、以下は「学習者の母語や文化」に関する回答である。

■日本文化や日本語を理解し、それらを例として用いながら説明することができる。

これにより、学習者は簡単に理解することができる。（経験 30 年以上・スワヒリ語教師）

■日本でインドネシア語を教える上で、日本文化を知ることはとても大切である。この知識は、学習者に合った教材を作成するときや、学習者の思考回路に合った指導法を考えるときに役立つ。（経験 25－30 年・インドネシア語教師）

■b/v や l/r の発音など、日本人学習者にとって困難な点を知ること。（経験 20－25 年・英語教師）

■発音はかなり大変である。モンゴル語と日本語は文法的にかなり似ているが、表現の違いがたくさんある。そして言葉の綴りと母音調和など日本語と違うところもある。（20－25 年・モンゴル語教師）

目標言語に関する知識だけでなく、学習者の母語である日本語や、日本文化を知ることの重要性が述べられている。これらの回答が多かったのは、学習者の身近なことを用いて説明したり例示できたりするから、あるいは目標言語と日本語を比較し、何が困難で何に躓きやすいかなどを前もって予測できるからだと考えられる。次はニーズに関する意見である。

■学習者自身が何のために学習したいか（さまざまなニーズがある）を把握しつつ、教室の中で、それらのニーズにできるだけアクセスできるようなシラバスを立てる。（10－15 年・ドイツ語教師）

■学習者のニーズを理解し、クラスやコースをアレンジすること。（経験 20－25 年・英語教師）

■学生のニーズに応えること。（経験 15－20 年・スペイン語教師）

本調査の調査協力者の所属機関はさまざまであり、そこで学ぶ学習者の目的も多種多様である。さらに同じ所属機関でも学習者によって学習目的が異なることもある。学習者のバックグラウンドを知ることで、目の前の学習者に合ったコースやシラバスが設計できるのであろう。次に、日本人学習者の性格に関する知見である。

■非常にシャイなため、会話の授業に苦労する。（経験 25－30 年・インドネシア語教師）

■シャイな学習者が多いので、会話練習の展開に苦労することが多い。（経験 25－30 年・中国語教師）

■日本人は外国語学習に受け身傾向が強いので会話に活発に参加しない。（経験 10－15 年・朝鮮語教師）

■学習者たちはシャイで、間違いが怖いからあまり参加しない。（経験 0－5 年・フランス語教師）

■日本人学習者は文法的、語彙的に完璧な正確さを求める傾向がある。自身がイメージしている意味またはニュアンスが 100%伝えられない場合、言い換えて表現しようとしない。完璧にしたいというこの気持ちが、滑らかなコミュニケーショ

ンを困難にしている。（経験 30 年以上・英語教師）

日本人学習者の「シャイで、間違えたくない」という性格が多く述べられている。①授業運営でも述べたように、不安低減に関する意見が多かったのは、こういった理由からだと考えられる。

⑤外的要素・物質的要素には次のような意見があった。

■現地で教えるなら、生教材がたくさん手に入るが、日本にはなかなかない。現在は YouTube にあるドラマやオンラインの新聞記事などを使っているが、生教材の多様性に欠けている。（経験 0－5 年・ベトナム語教師）

■丁度良いと思う教材や副教材がなかなかない。韓国で作られた教材はたくさんあるが、そのまま日本で教えるには適切でないところが多い。（経験 10－15 年・朝鮮語教師）

■教科書、練習帳、CD、辞書などスワヒリ語教材が日本では非常に少ない。（経験 30 年以上・スワヒリ語教師）

■大学の施設が今どきの学習スタイルに追いついてない場合が多いのではないかと思う。（経験 10－15 年・ドイツ語教師）

■非常勤講師に教育機関から経済的な支援がない。すべての教材、教科書等を自分のお金で買わなければいけない。母国の（ロシアの）大使館や領事館からも支援がまったくない。（経験 20－25 年・ロシア語教師）

■困難の 1 つは、一部の学習者の忙しいスケジュールでは、週数時間の授業で学んだものを復習して、応用することがなかなかできないことである。つまり、多くの授業の時間が既習事項の復習に充てられ、進度が非常に遅くなってしまう。（経験 0－5 年・英語教師）

■第 2 外国語においては、時間的・物理的制約が問題である。（経験 15－20 年・スペイン語教師）

■実際の授業を見ることなく、マネージャーがクラスに関して決定権を持つこと。例えば教師と相談せずに、テキストやカリキュラムを勝手に変更する。それに対し「新しいカリキュラムは適当でない」とマネージャーに言っても、受け入れられない。引き続きそのカリキュラムで教え続けても、学習者の不満が溜まるだけである。（経験 5－10 年・英語教師）

■中等教育ではビューロクラシーが圧力になる。（経験 20－25 年・英語教師）

■学習者の進歩でなく、利益だけを考える語学学校。（経験 10－15 年・英語教師）

日本で教える上で適切な機材・教材の入手が問題となる場合が多いようである。それに加え、学習時間の確保ということも困難なようである。日本のトップダウン型の教育体系に対する鋭い意見もあり、それが母語話者教師にとって障害となっていることも窺えた。

最後に、⑥その他である。

■学習者が自文化や自分の言語に対する感性を養っていくことも大切である。（経験 10－15 年・ドイツ語教師）
■不要なプライバシーに関することを無理強いして言わせない配慮ができる。（経験 15－20 年・朝鮮語教師）
■外国語教師のネットワーク。教師の勉強会を実施すること。（経験 20－25 年・ロシア語教師）

以上、具体的な回答を見ても明らかなように、教授経験や指導言語が違っていても、同様の意見が多いことが確認できた。

6. まとめ

本研究では、日本で教える母語話者教師から得られた知見を、よい外国語教育の要素として①授業運営、②教師の人柄・人間性、③教師の知識・技能・経験、④学習者理解、⑤外的要素・物質的要素、⑥その他といった 6 つに分類した。そして、指導言語が違っていても同様の回答が多くあることも確認された。本研究で多く挙げられた知見は、日本で教える母語話者教師が考えるよい外国語教育の要素だと言えるであろう。しかし、本調査に含まれていない外国語の先生も多く存在するので、今後はより広く日本における外国語教育を調査するために、さまざまな外国語教師を対象とした研究が求められる。加えて、日本語母語話者の多種多様な外国語教師でも同様の傾向が見られるのかどうかといった研究課題も考えられる。

また本研究の結果は、日本国外で日本語を教える日本語母語話者教師に対しても、同様に言える部分が大いにあると言えるであろう。というのは、自身の文化背景とは異なる環境下で母語を教えるという点において、今回の調査協力者と重なる部分があるからである。

最後になるが、よりよい外国語教育を目指し、日本語教育学や他の外国語教育学が連携・協力し、外国語教育間で今後なお一層知見を共有していけたら幸甚である。

謝辞

調査に協力してくださった母語話者教師の方々、並びに関係者各位に深く感謝を申し上げます。

注

1 本稿は、外国語教育学会第 19 回研究報告大会（2015 年 11 月 29 日実施）での研究発表「日本で教える母語話者教師が考えるよい外国語教育 - 自由記述データと捕獲率を用いた分析から - 」の内容を加筆・修正し、論文にしたものである。
2 ここでは、言語の優劣を表しているのではなく、単に世界全体で話者や学習者が多いか少ないかを意味している。
3 捕獲率の具体的な理論、計算方法等に関しては豊田・大橋・池原（2013）を参照されたい。

参考文献

Antier, E. (2012). L'éthique du lien dans la relation éducative: pour une reconnaissance de la pratique plurilingue et pluriculturelle des enseignants natifs. *Studies of language and culture* 16, 1−18.

Axel, H. (2011). Deutsch oder Japanisch?: Wahl der Unterrichtssprache im japanischen Deutsch-als-Fremdsprache-Unterricht. *Hiroshima studies in language and language education* 14, 101−115.

Axel, H. (2012). Ansichten japanischer Studierender uber die Unterrichtssprache muttersprachlicher Deutschlehrender: Ergebnisse einer Fallstudie. *Hiroshima studies in language and language education* 17, 103−122.

Axel, H. (2013). Anpassung der Unterrichtssprache an das Sprachniveau der Lernenden: Ergebnisse einer Befragung japanischer Deutschlernender. *Hiroshima studies in language and language education*16, 223−237.

Axel, H. (2014). Faktoren bei der Wahl der Unterrichtssprache im DaF-Unterricht in Japan: Umfrage unter deutschen und japanischen Deutschlehrenden. *Hiroshima studies in language and language education*17, 239−251.

Cotsworth, B. & Medlock, T. (2013). University student opinions on native English teachers using their L1 in the classroom. *Kansai University forum for foreign language education* 12, 157−168.

DeLury, D. B. (1947). On the estimation of biological populations. *Biometrics 3*, 145−167.

Dietze, H. V., Dietze, A. V. & Joyce, P. (2009). Researching the role of L1 (Japanese) in the English (EFL) classroom. *IERI Journal 5*, 35−52.

Morita, S (2005). Japanese University Students' Perceptions and Attitudes Toward Native and Non-Native English Speaking Teachers: A Case Study of English Major Students in Japan (Exploring the Evolving Goals of English Education).『JACET全国大会要綱』44、198−199.

Murahata, G. & Murahata, Y. (2000). Perceived Aspects of Native and Non-Native English Speaking Teachers by Japanese Learners of English. 『国際社会文化研究』1, 103−118.

Rebuck, M. (2005). The use of Japanese by Native English-Speaking Teachers: The Student's Perspective. *Journal of Humanities and Social Sciences 18*, 135−158.

Romero, Y. (2010). The Native Speaker Re-examined: The Ideal ELT in Japan. *Educational Studies 52*, 217−225.

Saito, T. (2014a). Exploring Japanese College Students’ Perceptions of Native and Nonnative Speaker English Teachers.『流通経済大学論集』48(3)、367−378.

Saito, T. (2014b). Investigating Japanese College Student Preferences for Native and Nonnative Speaker English Teachers.『流通経済大学論集』49(1)、49−62.

Schnabel, Z. E. (1938). The estimation of total fish population of a lake. *American Mathematical Monthly 45*, 348−352.

川喜田二郎 (1967). 『発想法：創造性開発のために』. 東京：中公新書.

佐久間勝彦 (1999). 「海外で教える日本人日本語教師をめぐる現状と課題：タイでの

聞き取り調査を中心に」『世界の日本語教育＜日本語教育事情報告編＞』5、79−107.
高木裕子・佐藤綾 (2006). 「日本語教師に求められる実践能力を規定する要因：「全体」「日本国内」「海外」間での比較」『実践女子大学人間社会学部紀要』2、41−60.
豊田秀樹・大橋洸太郎・池原一哉 (2013). 「自由記述のカテゴリ化に伴う観点の飽和度としての捕獲率」『データ分析の理論と応用』3、1−13.
平畑奈美 (2009). 「海外で活動する日本人日本語教師に望まれる資質の構造化：海外教育経験を持つ日本人日本語教師への質問紙調査から」『早稲田日本語教育学』5、15−29.

資料：日本で教える母語話者語学教師に関する調査

・日本での所属機関（Affiliated teaching institution in Japan）
☐初中等教育（Primary and secondary school）
☐大学（University, College）
☐公的機関（Public institution）
☐語学学校（Language school）
☐プライベート（Private）
☐その他:（　　）

・指導言語（Teaching language）

_____

・日本での教授経験（Teaching experience in Japan）
☐0年～5年（0~5 years）
☐5年～10年（5~10 years）
☐10年～15年（10~15 years）
☐15年～20年（15~20 years）
☐20年～25年（20~25 years）
☐25年～30年（25~30 years）
☐30年以上（30 years~）

1. 日本で外国語を教える上で何が大切だと思いますか。3~5行程度で自由に記述してください。（What do you think is important in foreign language teaching in Japan? Please write between 3 and 5 lines in response.）

_____
_____
_____
_____
_____

2. 日本で外国語を教える上で何に苦労しますか。3~5行程度で自由に記述してください。（What are the difficulties in foreign language teaching in Japan? Please write between 3 and 5 lines in response.）

3. 日本においてよい外国語教師とは何だと思いますか。3~5行程度で自由に記述してください。（What do you think makes a good foreign language teacher in Japan? Please write between 3 and 5 lines in response.）